*Tsukuba Psychological Research*
2021, **59**, 1-8



# 中学生における社会的達成目標と学校適応との関連[1, 2)]

筑波大学大学院人間総合科学研究科[3)]　海沼　　亮

筑波大学人間系　外山　美樹

The Relations Between Social Achievement Goals and School Adjustment within Junior High-School Students

Ryo Kainuma (*Graduate School of comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)
Miki Toyama (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purposes of this paper are to (a) develop a revised version of the Social Achievement Goals Scale and to confirm its reliability and validity and (b) examine the relations between social achievement goals and school adjustment within junior high-school students. In Studies 1 and 2, respectively, 599 and 199 junior high-school students completed a questionnaire. The results of Study 1 indicate the reliability and validity of the revised scale, while the path analysis results of Study 2 reveal that the approach goals of social mastery and social performance both exert positive influences on school adjustment.

**Key words:** social achievement goals, junior high school students, school adjustment

## 問題と目的

中学生の学校適応を支えるうえで，友人関係が重要な役割を果たしていることが明らかにされている（e.g., 石本他，2009；大久保，2005）。例えば，大久保（2005）は，学業や教師との関係と比べて，友人関係が学校への適応感に強く影響を与えていることを報告している。さらに，青年期は，友人関係への関心が高まることも報告されている（Richards, Crowe, Larson, & Swarr, 1998）。したがって，友人への関心が高まる時期に，中学生の学校適応を支える友人関係の在り方について検討することは意義のあるものと考えられる。

近年では，こうした友人関係のあり方について「動機づけ」の観点から捉える試みがなされている（黒田・桜井，2001；岡田，2005；Ryan & Shim, 2006）。例えば，黒田・桜井（2001）は，中学生における友人関係の中で「対人的経験の獲得」や「自己の成長」を目指す「経験・成長目標」や「性格について良い評価を得ること」を目指す「評価・接近目標」を持つことは，抑うつ傾向を低減することを報告している。その一方で，「性格について悪い評価を避けること」を目指す「評価・回避目標」を持つことは，抑うつ傾向を促進することを報告している。そして，岡田（2008）は，友人関係を動機づけの観点から捉えることは，親密な友人関係の形成の個人差を検討する際に，有用な視点であることを指摘している。したがって，友人関係の在り方を検討するうえで，動機づけに着目することは有用であると考えられる。そこで，本研究では友人関係への動機づけに着目する。

1）この研究は科学研究費補助金（課題番号：19J10360）による助成を受けた。
2）本研究の結果の一部は，日本発達心理学会第31回大会にて発表されている。
3）日本学術振興会特別研究員
連絡先：✉mtoyama@human.tsukuba.ac.jp（外山美樹）

これまでの友人関係への動機づけに関する実証研究は，主要な学習動機づけ理論である自己決定理論（Deci & Ryan, 2000）や達成目標理論（Dweck & Leggett, 1988）を対人場面に応用する形で研究が進められてきた（岡田，2008）。その中でも達成目標理論は，個人が志向するコンピテンスの捉え方に着目した目標理論であり，学習それ自体や自身の能力の伸長を目指す「熟達目標（mastery goal）」と自身の能力の呈示や他者を凌駕することを目指す「遂行目標（performance goal）」の2種類の目標が考えられてきた（Dweck & Leggett, 1988）。さらに，Elliot & Church（1997）は，遂行目標を他者よりもできることを目指す遂行接近目標（performance-approach goal）と他者よりもできないことを避けることを目指す遂行回避目標（performance-avoidance goal）に細分化し，遂行目標の中でも遂行回避目標が学業達成と負の関連を有することを報告している。近年では，上記の三目標について学習場面だけでなく，教師の職能場面（Butler, 2007）や対人場面（Ryan & Shim, 2006）など多様な領域に応用されてきた。

そして，達成目標理論の中でも友人関係などの社会的場面に適用した概念は，「社会的達成目標（social achievement goals）」として，国内外を通して数多くの研究が進められてきた（Ryan, Jamison, Shin, & Thompson, 2012）。具体的には，社会的達成目標とは，個人の社会的コンピテンスの捉え方に着目した概念であり（Ryan, Kiefer, & Hopkins, 2004; Ryan & Shim, 2006, 2008），これまで三つの目標が検討されてきた。

第1に，「社会的熟達目標（social development goal）」は，友人関係それ自体や友人関係によってポジティブな結果を得ることを目指す目標であり，適応を予測する目標であるとされている（Ryan et al., 2012）。第2に，「社会的遂行接近目標（social demonstration-approach goal）」は，周囲より自身の社会的コンピテンスが優れていることを目指す目標であり，適応・不適応両方の結果を予測する目標であるとされている（Ryan et al., 2012）。第3に，「社会的遂行回避目標（social demonstration avoid goal）」は，周囲より自身の社会的コンピテンスが劣っていないことを目指す目標であり，不適応を予測する目標であるとされている（Ryan et al., 2012）。また，篠原（2019）は，本邦の高校生を対象に，社会的達成目標が社会的スキルを介し，適応感に与える効果を検討している。分析の結果，社会的熟達目標や社会的遂行接近目標が，社会的スキルを高め，適応感を高めるプロセスと社会的遂行回避目標が社会的スキルを低め，適応感を低減するプロセスを報告している。以上のように，国内外を通して，社会的熟達目標，社会的遂行接近目標，社会的遂行回避目標の三目標は，適応や精神的健康と異なる関連をもつことが示されてきた。

こうした先行研究を受けて，海沼・櫻井（2018）は，上述の三目標に，社会的熟達回避目標を加えた四目標の機能について中学生を対象に調査研究を実施している。具体的には，学業場面における達成目標は，熟達目標も遂行目標と同様に熟達接近目標と熟達回避目標に区別できること（Elliot & McGregor, 2001）を受けて，社会的熟達目標を友人関係の形成や相互理解を目指す「社会的熟達接近目標（social mastery-approach goal）」と友人関係の維持を目指す「社会的熟達回避目標（social master-avoidance goal）」に区別し，調査研究を実施している。その結果，(a) 社会的熟達接近目標と社会的熟達回避目標は，友人関係における充実感や親和動機と異なる関連を有すること，(b) 社会的熟達接近目標は，向社会的行動を高め，攻撃行動を低減する働きを有していたものの，社会的熟達回避目標は，向社会的行動を高め，攻撃行動を低減するような適応を促進する機能が確認されなかったことが報告されている。よって，社会的熟達目標も遂行目標と同様に，接近と回避に細分化して検討する必要があるものと考えられる。

海沼・櫻井（2018）の尺度は，社会的熟達目標を細分化し，社会的達成目標を包括的に測定できるといった点で，有用であるものの，社会的遂行目標を構成する項目の簡潔さや他者との比較に関する文言として「クラスメイト」を使用しており，適用可能な文脈が限定されるという課題が見受けられた。さらに，先行研究では，中学生を対象に，抑うつ（黒田・桜井，2001）や向社会的行動（海沼・櫻井，2018）など，学校適応に寄与することが予想される変数との関連は見出されているものの，社会的熟達回避目標を含んだ四目標について，学校適応との関連について直接的に検討した研究は，見受けられない。

そこで，本研究では，改訂版社会的達成目標尺度を作成し，学校適応との関連を検討することを目的とする。具体的には，研究1では，中学生の社会的達成目標を包括的に測定できる改訂版社会的達成目標尺度を作成することを目的とする。研究2では，研究1にて開発された改訂版社会的達成目標尺度を用いて，学校適応との関連を検討する。

なお，改訂版社会的達成目標尺度の信頼性は，内的一貫性（Cronbachのα係数）を用いて確認する。妥当性は，海沼・櫻井（2018）と同様に，尺度項目を修正した社会的遂行接近目標と社会的遂行回避目標について以下の三変数を用いて確認する。

第一に，友人関係における充実感（黒田・桜井，2003）との関連を確認する。友人関係における充実感は，「友人との関係に満足している」等の項目から構成されているため，周囲からの肯定的な評価の獲得を志向する社会的遂行接近目標との正の関連が想定される。また，精神的健康を損ねることが多く報告（e.g., Ryan et al., 2012）されている社会的遂行回避目標とは負の関連が想定される。

第二に，親和動機（杉浦，2000）との関連を確認する。親和傾向は，他者との積極的な関係構築への志向性を表しているため，社会的遂行接近目標と正の関連が想定される。対して，拒否不安は，他者からの拒否を恐れる志向性を表しているため，まわりからのネガティブな評価の獲得の回避に焦点化する社会的遂行回避目標と正の関連が想定される。なお，社会的遂行接近目標は，先行研究（海沼・櫻井，2018；光浪，2012）において，拒否不安との正の関連が報告されているため，社会的遂行接近目標と拒否不安の間にも正の関連が想定される。

第三に，友だちの数との関連を確認する。友だちの数は，周囲からの人気やより多くの友だちを求める志向性と関連することが予想されるため，社会的遂行接近目標と正の関連を有することが想定される。

また，学校適応の指標は，永作・新井（2005）や外山（2016）を参考に，学校生活全般へのポジティブな認識の程度を表す学校生活享受感（古市・玉木，1994）と学校生活における対人関係に関する満足度を表す学校生活満足度（河村，2019）を使用する。

## 研究 1
## 方　法

### 調査協力者

関東地方の中学生を対象に質問紙調査を実施した。回答が中断されているものや同一選択肢が連続して選択されているもの，友だちの数の回答において，+3標準偏差以上の値を記入したものなど，回答に不備があったと判断したものを除外した559名（中学1年生208名，中学2年生164名，中学3年生187名；男子262名，女子281名，無回答16名）を分析対象者とした。また，確認的因子分析を実施する際には，完全情報最尤法を用いて欠測値を補填し，その他の分析では，分析ごとに欠測値を除外した。なお，研究2においても同様の手続きを用いて分析対象者を決定した。

### 倫理的配慮

調査は，著者らの所属する大学の研究倫理委員会の承認を得たうえで，学校長の承認を得て，各クラスにて集団で実施した。なお，研究2についても同様の倫理的配慮をとったため，記載を省略する。

### 調査内容

**基本属性**　性別，学年について記述する形で回答を求めた。

**社会的達成目標**　社会的熟達接近目標5項目と社会的熟達回避目標5項目は，海沼・櫻井（2018）の項目を使用した。社会的遂行接近目標5項目と社会的遂行回避目標3項目は，現職教員および中学生からのコメントを参考に表現を修正した。これらの項目について，先行研究（海沼・櫻井，2018；黒田・桜井，2001）と同様に，「あなたは友だち関係の中でどのようなことに関心がありますか」と教示をし，4件法で回答を求めた。

**友人関係における充実感**　黒田・桜井（2003）の友人関係における充実感尺度を用いた。なお，各項目の文末表現は，海沼・櫻井（2018）と同様に，過去形から現在形へ修正した。「友だちとの関係に満足している」などの4項目について4件法で回答を求めた。

**親和動機**　杉浦（2000）の親和動機尺度を用いた。親和傾向9項目（項目例：「友人とは本音で話せる関係でいたい」），拒否不安9項目（項目例：「仲間から浮いているように見られたくない」）について，5件法で回答を求めた。

**友だちの数**　海沼・櫻井（2018）と同様に，「学校でよく一緒に行動する友だちの人数」を回答欄に，記述する形式で回答を求めた。

## 結　果

### 社会的達成目標尺度の因子構造の検討

社会的達成目標尺度の各項目への回答傾向を確認したうえで，各目標を構成する項目に対し，最尤法による因子分析を実施した。その結果，社会的遂行接近目標を構成する「友だちから好かれること」が十分な負荷量を示さなかったため，当該項目を除いた17項目を用いて4因子斜交モデルによる確認的因子分析を実施した（Table 1）。その結果，適合度は，$\chi^2(113)=492.92$（$p<.05$），CFI＝.91，RMSEA＝.08であり，分析モデルのあてはまりの良さが概ね確認された。

Table 1
改訂版社会的達成目標尺度の確認的因子分析結果

| 項目 | 因子負荷量 | *M* | *SD* |
|---|---|---|---|
| **F1：社会的熟達接近目標** | | | |
| 自分を本当に理解してくれる友だちをもつこと。 | .87 | 3.47 | 0.74 |
| 友だちともっとお互いに理解し合えること。 | .72 | 3.36 | 0.74 |
| 本音でつきあえる友だちをもつこと。 | .77 | 3.53 | 0.74 |
| 一緒にいて居心地のよい友だちを見つけること。 | .75 | 3.56 | 0.70 |
| 友だちとの関係をさらに深めること。 | .61 | 3.38 | 0.77 |
| **F2：社会的熟達回避目標** | | | |
| 今の友だち関係をなんとか続けていくこと。 | .68 | 2.97 | 0.91 |
| 新しい友だちを見つけるより今の友だち関係が壊れるのを避けること。 | .62 | 2.79 | 0.90 |
| 今までの友だち関係を失わないこと。 | .78 | 3.22 | 0.84 |
| できるかぎり、友だちとケンカしないこと。 | .56 | 2.99 | 0.90 |
| できるかぎり、友だちを傷付けないこと。 | .52 | 3.46 | 0.71 |
| **F3：社会的遂行接近目標** | | | |
| 友だちから注目される人でいること。 | .66 | 2.24 | 0.91 |
| 人気のあるグループにいること。 | .86 | 2.06 | 0.91 |
| まわりのグループと比べて、大きなグループにいること。 | .83 | 1.93 | 0.85 |
| まわりより、たくさんの友だちをもつこと。 | .70 | 2.37 | 0.97 |
| **F4：社会的遂行回避目標** | | | |
| 自分の所属するグループがない状況を避けること。 | .70 | 2.62 | 0.92 |
| まわりより友だちが少なくないこと。 | .57 | 2.17 | 0.86 |
| まわりから友だちがいないと思われる場面を避けること。 | .75 | 2.42 | 0.91 |

Table 2
研究 1 における各変数の基本統計量，信頼性係数，および相関分析の結果

| | | *n* | *M(SD)* | α係数 | 相関分析の結果 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 1 | 社会的熟達接近目標 | 554 | 3.46（0.59） | .86 | − | | | | | | |
| 2 | 社会的熟達回避目標 | 550 | 3.08（0.61） | .77 | .54** | − | | | | | |
| 3 | 社会的遂行接近目標 | 557 | 2.15（0.75） | .84 | .31** | .48** | − | | | | |
| 4 | 社会的遂行回避目標 | 551 | 2.40（0.71） | .71 | .28** | .52** | .64** | − | | | |
| 5 | 友人関係における充実感 | 554 | 3.43（0.58） | .85 | .52** | .35** | .28** | .13** | − | | |
| 6 | 親和傾向 | 553 | 3.94（0.85） | .92 | .71** | .49** | .48** | .36** | .61** | − | |
| 7 | 拒否不安 | 551 | 3.46（0.89） | .90 | .40** | .63** | .54** | .63** | .26** | .55** | − |
| 8 | 友だちの数 | 546 | 5.52（4.63） | − | .07 | .10* | .25** | .12** | .16** | .19** | .09* |

** $p<.01$，* $p<.05$

### 各変数の得点化と統計量の算出

測定した各変数に対して，Cronbachのα係数を算出した。その結果，一定の内的一貫性が確認されたため，各尺度の加算平均値を尺度得点として以後の分析に用いた。各変数の基本統計量，α係数，相関係数をTable 2に示した。

### 他の変数との関連の検討

社会的達成目標尺度の妥当性を確認するため，他の社会的達成目標を統制した偏相関を算出した。その結果，社会的遂行接近目標は，友だちの数（$pr=.22$，$p<.01$），友人関係における充実感（$pr=.18$，$p<.01$），親和傾向（$pr=.29$，$p<.01$），拒否不安（$pr=.11$，$p<.01$）と有意な正の偏相関を示した。社会的遂行回避目標は，拒否不安（$pr=.35$，$p<.01$）と

有意な正の偏相関，友人関係における充実感（$pr$ ＝－.15，$p$＜.01）と有意な負の偏相関を示した。

### 性差・学年差の検討

社会的達成目標の性差と学年差を検討するため，二要因分散分析を行った。その結果，各目標に対する性別の主効果が確認された。

具体的には，社会的遂行接近目標は，男子（$M$＝2.36，$SD$＝0.80）の方が女子（$M$＝1.95，$SD$＝0.63）よりも高得点であった（$F$（1,535）＝45.32，$p$＜.01，$\eta_p^2$＝.08）。また，社会的遂行回避目標も男子（$M$＝2.49，$SD$＝0.74）の方が女子（$M$＝2.31，$SD$＝0.68）よりも高得点であった（$F$（1,529）＝7.99，$p$＜.01，$\eta_p^2$＝.02）。

## 考　　察

研究１の目的は，中学生の社会的達成目標を包括的に測定できる改訂版社会的達成目標尺度を作成することであった。因子構造の検討，他の変数との関連の検討，性差・学年差の検討から改訂版社会的達成目標尺度の信頼性と妥当性が概ね確認された。

改訂版社会的達成目標尺度の因子構造を検討した結果，許容できる程度の適合度が示された。この結果は，海沼・櫻井（2018）と整合する結果であった。したがって，本研究で作成した改訂版社会的達成目標尺度も４因子構造から構成されるものと考えられる。

さらに，他の変数との関連を検討した結果，社会的遂行接近目標は，友だちの数，友人関係における充実感，親和傾向，拒否不安と正の関連を有していた。社会的遂行回避目標は，拒否不安と正の関連を有し，友人関係における充実感と負の関連を有していた。こうした結果は，本研究の仮説を支持するものであった。よって，改訂版社会的達成目標尺度の妥当性の一部が確認されたものと考えられる。

最後に，社会的遂行接近目標，社会的遂行回避目標の性差と学年差を検討した。二要因分散分析の結果，社会的遂行接近目標，社会的遂行回避目標ともに，男子の方が女子よりも高得点であった。海沼・櫻井（2018）においても社会的遂行接近目標が男子のほうが女子よりも高くなったことを報告しており，本研究における結果もこうした知見と矛盾しないものと考えられる。なお，社会的遂行回避目標の性差は，小さな効果量のため，慎重な解釈が必要であると考えられる。

以上の結果，一定の信頼性と妥当性を備えた改訂版社会的達成目標尺度が作成できたものと考えられる。続けて，研究２では，改訂版社会的達成目標尺度を用いて学校適応との関連を検討する。なお，改訂版社会的達成目標尺度の交差妥当化を検討するため，確認的因子分析を実施し，適合度を確認する。

## 研 究 2
## 方　　法

### 調査協力者

関東地方の中学生199名（中学１年生97名，中学２生102名；男子109名，女子84名，無回答６名）を分析対象者とした。

### 調査内容

**基本属性**　性別，学年について記述する形で回答を求めた。

**社会的達成目標**　研究１にて作成された改訂版社会的達成目標尺度を使用した。

**学校生活享受感**　古市・玉木（1994）の学校生活享受感尺度を用いた。「私は学校に行くのが好きだ」などの10項目について，５件法で回答を求めた。

**学校生活満足度**　河村（2019）の楽しい学校生活を送るためのアンケート（中学生用）を用いた。同級生や先生から承認されている程度を表す承認（項目例：「私はクラスの中で存在感があると思う」）と周囲からのからかいや排斥，学校不適応感を表す被侵害（項目例：「クラスの人から無視されるようなことがある」）の２下位尺度から構成される。各下位尺度10項目について，５件法で回答を求めた。

## 結　　果

### 社会的達成目標尺度の確認的因子分析の結果

研究１と同様のモデルを用いて，確認的因子分析を実施した。その結果，適合度は，$\chi^2$（113）＝260.15（$p$＜.05），CFI＝.91，RMSEA＝.08であり，モデルのあてはまりの良さがある程度確認された。

### 各変数の得点化と統計量の算出

測定した各変数に対して，Cronbachのα係数を算出した。その結果，一定の内的一貫性が確認された。したがって，各尺度の加算平均値を尺度得点として以後の分析に用いた。各変数の基本統計量，α係数，相関係数をTable 3に示した。

### 学校適応との関連の検討

社会的達成目標と学校適応との関連を検討するため，社会的達成目標を独立変数，学校生活享受感，

Table 3
研究2における各変数の基本統計量，信頼性係数，および相関分析の結果

| | | *n* | *M(SD)* | α係数 | 相関分析の結果 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 社会的熟達接近目標 | 196 | 3.50（0.63） | .87 | − | | | | | |
| 2 | 社会的熟達回避目標 | 193 | 3.30（0.66） | .83 | .71** | − | | | | |
| 3 | 社会的遂行接近目標 | 193 | 2.32（0.83） | .87 | .33** | .41** | − | | | |
| 4 | 社会的遂行回避目標 | 181 | 2.50（0.83） | .74 | .36** | .51** | .58** | − | | |
| 5 | 学校生活享受感 | 193 | 3.42（0.93） | .85 | .44** | .35** | .37** | .23** | − | |
| 6 | 承認 | 183 | 3.30（0.84） | .90 | .56** | .38** | .52** | .35** | .65** | − |
| 7 | 被侵害 | 189 | 1.88（0.78） | .89 | −.22** | −.08 | −.15* | −.07 | −.47** | −.32** |

** $p<.01$，* $p<.05$

Table 4
社会的達成目標と学校適応との関連

| | 学校生活享受感 | 承認 | 被侵害 |
|---|---|---|---|
| 社会的熟達接近目標 | .35** | .56** | −.21* |
| 社会的熟達回避目標 | .03 | −.17† | .16 |
| 社会的遂行接近目標 | .34** | .49** | −.24* |
| 社会的遂行回避目標 | −.12 | −.07 | .06 |
| $R^2$ | .27** | .50** | .07* |

** $p<.01$，* $p<.05$，† $p<.10$

承認，被侵害を従属変数とする重回帰分析を各々実施した（Table 4）。

分析の結果，社会的熟達接近目標は，学校生活享受感（$\beta=.35$，$p<.01$），承認（$\beta=.56$，$p<.01$）と正の関連，被侵害（$\beta=-.21$，$p<.05$）と負の関連を有していた。また，社会的熟達回避目標は，承認（$\beta=-.17$，$p<.10$）と負の関連を有する傾向が示された。最後に，社会的遂行接近目標は，学校生活享受感（$\beta=.34$，$p<.01$），承認（$\beta=.49$，$p<.01$）と正の関連，被侵害（$\beta=-.24$，$p<.05$）と負の関連を有していた。

## 考　察

研究2の目的は，社会的達成目標と学校適応との関連を検討することであった。なお，社会的達成目標と学校適応との関連の検討に先立ち，改訂版社会的達成目標尺度の4因子構造が研究1以外のサンプルでも認められるかを検討した。その結果，許容できる範囲の適合度が確認された。したがって，中学生における社会的達成目標の4因子構造は，広く認められるものと考えられる。

### 学校適応との関連の検討

重回帰分析の結果，社会的熟達接近目標は，学校生活享受感，承認と正の関連を有していた。また，被侵害とは，負の関連を有していた。社会的熟達目標は，クラスにおける所属感や孤独感と負の関連があること（Mouratidis & Sideridis, 2009）や社会的スキルを高め，適応感を高めること（篠原，2019）が報告されており，本研究の結果もこうした知見と一致する結果であると考えられる。すなわち，友人関係において，友人との相互理解や関係の深化を志向するものは，学校成員間の相互理解やかかわり方の向上につながることで，学校適応を高めるものと考えられる。

また，有意傾向ではあったものの社会的熟達回避目標は，承認と負の関連を有していた。すなわち，友人関係の維持を志向することは，学校内の成員からの承認を低減することにつながっていた。海沼・櫻井（2018）において，社会的熟達回避目標は適応を損ねるものではないことが報告されていた。しかしながら，本研究の結果を踏まえると，既存の友人関係の維持に焦点化することは，学校内で幅広く受容されることにはつながらず，承認を低減したものと考えられる。ただし，関連は有意傾向に留まっているため，今後も検討していく必要があるものと考

えられる。

社会的遂行接近目標は，学校生活享受感，承認と正の関連，被侵害と負の関連を有していた。社会的遂行接近目標は，人気（Shim, & Ryan, 2012）や喜び（Shim, Wang, & Cassady, 2013）との関連が報告されており，学校生活におけるポジティブな知覚を表す学校生活享受感や成員からの受け入れを表す承認とも正の関連が見出されたものと考えられる。すなわち，まわりからのポジティブな評価の獲得を目指すものは，学校生活へのポジティブ感情や周囲からの承認の程度を高く知覚することで，学校適応を高めているものと考えられる。

ただし，社会的遂行接近目標は，攻撃行動（e.g., 海沼・櫻井，2018；Ryan & Shim, 2008）との関連が報告されているため，この目標を基盤として，学校適応を高めることは，慎重になる必要があると考えられる。また，Mouratidis & Sideridi（2009）は，社会的遂行接近目標は，他者評定による仲間からの受容を低減し，孤独感を高めることを報告している。一方で，社会的遂行接近目標は，自己評定による人気と正の関連が報告（Ryan & Shim, 2008）されているため，測定法による違いによって，学校適応との関連が異なる可能性も考えられる。したがって，社会的遂行接近目標が学校適応を高める条件やプロセスについては，測定法も含め，詳細な検討が必要であると考えられる。

最後に，社会的遂行回避目標は，学校適応を低減する働きを有しているとはいえなかった。先行研究では，社会的遂行回避目標は，対人的なかかわりに影響することで，精神的健康や適応感を低減することが報告されている（e.g., 黒田・桜井，2003；篠原，2019）。それに対し，本研究では，学校生活享受感のような学校全体に対するポジティブな知覚を従属変数として扱っている。したがって，使用した従属変数の性質の違いによって，関連が比較的小さかったことが考えられる。また，社会的熟達目標（$\beta=.56$, $p<.01$）や社会的遂行接近目標（$\beta=.49$, $p<.01$）が，承認と強い関連を有していたため，社会的遂行回避目標の関連が見出されなかった可能性も考えられる。本研究の結果は，限られたサンプルを対象とした調査結果のため，引き続き検討が必要であると考えられる。

以上の結果から友人との関係形成や深化を志向する社会的熟達接近目標と周囲からのポジティブな評価の獲得を目指す社会的遂行接近目標が学校適応を予測することが示された。したがって，中学生の学校適応を支える際には，友人とのかかわりで望ましい結果を獲得できるという接近を志向する目標が重要であると考えられる。

最後に，本研究の課題について二点，言及する。第一に，本研究では，調査対象となった学校は，それぞれ一校ずつであった。そのため，結果の一般化可能性については慎重に解釈する必要がある。今後は，多様なサンプルを対象に調査研究を行うことで，社会的達成目標に関する知見の洗練化を図る必要があると考えられる。

また，研究２では，一時点で測定された変数を用いて因果関係を検討したため，慎重な解釈が必要であると考えられる。今後は，社会的達成目標と学校適応の因果関係を同定するための縦断研究を行う必要があると考えられる。

## 引用文献


Butler, R. (2007). Teachers' achievement goal orientations and associations with teachers' help seeking: Examination of a novel approach to teacher motivation. *Journal of Educational Psychology*, *99*, 241-252.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The" what" and" why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, *11*, 227-268.

Dweck, C. S., & Leggett, E. L. (1988). A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, *95*, 256-273.

Elliot, A. J., & Church, M. A. (1997). A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 218-232.

Elliot, A. J., & McGregor, H. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, *80*, 501-509.

古市裕一・玉木弘之（1994）．学校生活の楽しさとその規定要因　岡山大学教育学部研究集録，*96*，105-113.

石本雄真・久川真帆・斎藤誠一・上長　然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平（2009）．青年期女子の友人関係スタイルと心理・社会的適応および学校適応との関連　発達心理学研究，*20*，125-133.

海沼　亮・櫻井茂男（2018）．中学生における社会的達成目標と向社会的行動および攻撃行動との関連　教育心理学研究，*66*，42-53.

河村茂雄（2019）．Questionnaire Utilities　楽しい学校生活を送るためのアンケート（中学生用）　図

書文化社.
黒田祐二・桜井茂男（2001）．中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係 教育心理学研究，*49*，129-136.
黒田祐二・桜井茂男（2003）．中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム――ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討――　教育心理学研究，*51*，86-95.
光浪睦美（2012）．認知的方略の違いが対人関係における動機，目標志向性および対人行動との関係に及ぼす影響 パーソナリティ研究，*21*，124-137.
Mouratidis, A., & Sideridis, G. (2009). On social achievement goals: Their relations with peer acceptance, classroom belongingness, and perceptions of loneliness. *The Journal of Experimental Education*, *77*, 285-307.
永作　稔・新井邦二郎（2005）．自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究，*53*，516-528.
岡田　涼（2005）．友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討　――自己決定理論の枠組みから――　パーソナリティ研究，*14*，101-112.
岡田　涼（2008）．親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築　教育心理学研究，*56*，575-588.
大久保智生（2005）．青年の学校への適応感とその規定因――青年用適応感尺度の作成と学校別の検討――教育心理学研究，*53*，307-319.
Richards, M. H., Crowe, P. A., Larson, R., & Swarr, A. (1998). Developmental patterns and gender differences in the experience of peer companionship during adolescence. *Child Development*, *69*, 154-163.
Ryan, A. M., Jamison, R. S., Shin, H., & Thompson, G. N. (2012). Social achievement goals and adjustment at school during early adolescence. In Ryan, A. M., & Ladd, G. W. (Eds.). *Peer relationships and adjustment at school*. (pp. 165-186) IAP Information Age Publishing; US.
Ryan, A. M., Kiefer, S. M., & Hopkins, N. B. (2004). Young adolescents' social motivation: An achievement goal perspective. In P. R. Pintrich & M. L. Maehr (Eds.), *Advances in motivation and achievement: Vol.*13.*Motivating students, improving schools: The legacy of carol midgley*. (pp. 301-330). Greenwich, CT: JAI Press.
Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2006). Social achievement goals: The nature and consequences of different orientations toward social competence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *32*, 1246-1263.
Ryan, A. M., & Shim, S. S. (2008). An exploration of young adolescents' social achievement goals and social adjustment in middle school. *Journal of Educational Psychology*, *100*, 672-687.
Shim, S. S., & Ryan, A. M. (2012). What do students want socially when they arrive at college? Implications of social achievement goals for social behaviors and adjustment during the first semester of college. *Motivation and Emotion*, *36*, 504-515.
Shim, S. S., Wang, C., & Cassady, J. C. (2013). Emotional well-being: The role of social achievement goals and self-esteem. *Personality and Individual Differences*, *55*, 840-845.
篠原由花（2019）．高校生における社会的達成目標・社会的スキル・適応感の関連　青年心理学研究，*30*，131-140.
杉浦　健（2000）．2つの親和動機と対人的疎外感との関係　教育心理学研究，*48*，352-360.
外山美樹（2016）．子ども用楽観・悲観性尺度の作成および信頼性・妥当性の検討　教育心理学研究，*64*，317-326.

（受稿9月30日：受理11月30日）